

# 社会系教科において世界文化遺産を取り上げる意義

— シンガポールの小学校社会科教科書の記述に着目して —

鳴門教育大学大学院 金野誠志

## はじめに

UNESCOは、世界遺産の保存に協力するための革新的な教育手法の開発を目的とした世界遺産教育を推進しており<sup>1)</sup>、我が国でも世界遺産の価値や保護、活用に焦点を当てた教育が注目されつつある。そこでは、世界遺産が有する「顕著な普遍的価値＝Outstanding Universal Value」の理解が欠かせない<sup>2)</sup>。

我が国の新小学校学習指導要領（案）では、社会科でも世界文化遺産の言及はあるが、国家及び社会の発展に大きな働きをした先人の業績や優れた文化遺産についての理解が目的で、その手段として位置づいている<sup>3)</sup>。国家及び社会の発展に大きな働きをした先人の業績や優れた文化遺産が有する価値と世界文化遺産の「顕著な普遍的価値＝Outstanding Universal Value」とは必ずしも一致しないため、いかに両者の関係性を考慮し実践の俎上に載せるかは喫緊の課題である。しかし、我が国の小学校社会科には、世界文化遺産を中核とした内容が示されておらず、管見ながらこの課題を解決しようという意識は一部の研究者を除いて極めて低いという感が否めない。一方、現行のシンガポールの小学校社会科教科書は、2012年版のシラバス改訂に伴い編集されたもので、世界文化遺産を中核とした内容の単元がある。小論ではその内、「歴史都市ピガン」の記述から、我が国の小学校社会科における世界文化遺産に関する内容の教育について示唆を得ようというものである。

## I シンガポールの社会科で世界文化遺産を取り上げる目的

2012年版シンガポール小学校社会科シラバスでは、国民やグローバル市民、コミュニティや国家、全ての民族による文化の多様性といった多重なシティズンシップ育成に関わる語句が広くみられる。また、教科の基本的考え方として、学習者が生活する世界に責任を持ち貢献する見識があり、気づかひができ、参画する意思決定の質が高い市民の育成が目指されている<sup>4)</sup>。しかし、以下の目指す学習者像からして、ここでいう市民とは国民国家の国民としての側面が強調されていることを確認しておく必要がある<sup>5)</sup>。

- グローバルな見通しを持つシンガポール人としての自分のアイデンティティに対する他者のアイデンティティを理解する。
- シンガポールの視点を理解し世界を見る。
- 自分たちのコミュニティと国家に帰属する感覚を持っている。（筆者訳）

シラバスによると世界文化遺産に関する内容が位置している第6学年の考察の焦点は、「東南アジアはシンガポールにとってどのように重要か？」ということで、「東南アジアにおける自然的な環境や多様な生活の様子」、「文化的、経済的、地理的な関係を通じた結びつき」を理解し、更に「ASEANのなかで共有された共通の経験を探求することによる地域の協力の重要性」を理解していくことが期待されている。そのために必要な事実的な知識として、「東南アジアの国々の位置と自然の特色」、「東南アジアの人々の生活の様子の類似点と相違点」、「シンガポールと東南アジアの他の国々との結びつき」、「東南アジア諸国連合（ASEAN）の役割と重要性」があげられている<sup>6)</sup>。

このシラバスに基づき、シンガポール教育省カリキュラム設計開発部（Ministry of Education, Curriculum Planning and Development Division：以後、MOEと表記）が作成した教科書『Inquiring Into Our World』はA及びBの2巻がある。単元名は第1表の通りである<sup>9)</sup>。

第1表 教科書の単元名

6 A	6 B
1 東南アジアの人々と場 2 東南アジアの素晴らしさ 3 東南アジアの古代王国の業績	1 東南アジアの成長への貢献 2 東南アジアに生きる道 3 ASEANを通じた協力

（『Inquiring Into Our World』6 A, 6 Bから筆者訳・作成）

以下に示した教科書6 Bの最終単元の導入や学習の到達目標の記述からもわかるように、小学校での学習の集大成は、東南アジア地域、特に、東南アジア諸国連合（ASEAN）に加盟している国々との協力によるこの地域の平和と安定の重要性について学習することである<sup>9)</sup>。

#### 【導入の記述】

ASEANは東南アジアで重要な地域的組織です。ASEANは、人々や文化の多様な集団が存在する東南アジアの国々をまとめています。ASEANの目的は、この地域に平和と安定をもたらすことです。ASEANのシンボルを見てみましょう。このシンボルを見て、どんなことを考えましたか？（筆者訳）

#### 【到達目標】

- ASEANの成り立ちと目的が説明できること。
- ASEANの国々がどのように、お互いに協力しているか表現できること。
- 地域組織としてASEANの重要性が理解できること。（筆者訳）

多重的なシティズンシップ育成に関わる語句が広く見られるが、MOEが作成したシラバスだけでなくそれに基づいた教科書がナショナル・シティズンシップの育成を重視することは不思議ではない。この地域の平和と安定がシンガポールという国民国家にとっていかに重要かを正しく理解させたいという意図があることは、シラバスの考察の焦点「シンガポールにとって東南アジアはどのように重要か？」からも容易に想像できる。このよ

うな考えに基づき世界文化遺産を取り上げた単元は、教科書では第1表の6 A第2章「東南アジアの素晴らしさ」に位置づいている。

一方で、世界文化遺産の登録に際しては他に比類なき「顕著な普遍的価値＝Outstanding Universal value」を有しているかが問われるが、その証明には建造物や景観などについてその文化が持つ独自性や伝統技術を継承しているという「真正性（authenticity）」と、保護のため十分な広さや法律など、遺産の価値を証明し保護保全するための必要条件が整っているという「完全性（integrity）」とが要求される<sup>9)</sup>。つまり全人類のための遺産として保存しなければならない特別の価値が「顕著な普遍的価値＝Outstanding Universal value」であり、世界文化遺産とは国際社会全体で保護することが全世界の国民のために重要だと認めた価値を有する遺産ということである<sup>10)</sup>。

自国に世界文化遺産があれば、一国にとって重要な文化的価値を強調し国民国家の凝集性を高めるため、世界文化遺産を国民文化の象徴として扱うことも不可能ではないが、自国に世界文化遺産がなかった時期に、他国の世界文化遺産をどのようにシンガポールの教科書が記述しているか非常に興味深い。その記述内容からは、我が国で世界文化遺産についての内容を取り上げる際に大きな示唆を得ることができよう。

## II 「歴史都市ピガン」の世界遺産登録の経緯とその影響

### 1 経時的な空間認識と相対的な空間認識の関係性から

1572年、スペイン領となったピガンには、2つの保存中核地区がある。1つは広場（plaza）を囲むように位置付く大聖堂、大司教居住、地方政府庁舎などが立ち並ぶ公的な空間である。もう1つは、主として中国系メスティーソが建造したハバイ・ナ・バトと呼ばれる2階建ての家屋が並ぶ商業的な空間である。これらの建造物群がスペイン植民都市特有の都市計画の中にある<sup>11)</sup>。

世界文化遺産「歴史都市ピガン」については、「16世紀に始まるフィリピンのスペイン植民地支配期を通して、政治、宗教、商業の拠点であった。

南シナ海に注ぐ河川に囲まれた中州に位置する。長らくメキシコのアカプルコとフィリピンとの間の太平洋を跨ぐガレオン貿易の中継地点であった。」<sup>12)</sup>という前提の理解が登録の基盤にある。

ガレオン貿易とビガンの盛衰は無関係ではないが、ガレオン貿易のフィリピン側の起点はマニラであった<sup>13)</sup>。ビガンは、フィリピン内では、政治、宗教、商業の拠点の一つではあったが、ガレオン貿易という大きな経済的なシステムの中ではその地位はさほど高いわけではなく、マニラとの関係における一中継地点と解する必要がある。

ガレオン貿易により植民者が潤う部分が大きかったが、フィリピン政庁の財政は大幅な赤字を続けていたため、ガレオン貿易やメキシコ政庁からの赤字補填金に依存しないように推進されたのが1782年から導入された輸出用商品作物農業としてタバコの強制栽培および専売制度で、その代表的な生産地がイロコス地方だった。ガレオン貿易が1815年には廃止されても、たばこの専売制度は1881年まで続けられた。フィリピン政庁の財政は黒字化し、その後も、たばこは輸出品として重要な位置を占め続けた<sup>14)</sup>。そして、イロコス地方に於いて、地方とマニラを結び、生産・集散・輸送まで幅広く掌握したのが中国系メスティーソで、富裕層となった彼らを施主としてハバイ・ナ・バトがこの時期に建築されたのである<sup>15)</sup>。

以上を顧みると、ガレオン貿易ではあたかもビガンが中心的な役割を果たしており、それがハバイ・ナ・バトの建築に直接影響を及ぼしたわけではないことがわかる。経時的な空間認識への無自覚は、区割りされた土地の公的な空間と商業的な空間の2つの保存中核地区が当初より同時に並立し融合していたという誤解をもたらしかねない。また、植民地首府マニラに対する地方都市ビガンという相対的な空間認識への無自覚は、ビガンこそがガレオン貿易の拠点であったという誤解をもたらしかねない。この誤解が覆い隠され修正されないままだと16世紀の植民都市建設時から変わらぬ「歴史都市ビガン」が創造され本質化されていく危険性が憂慮される。

## 2 世界遺産登録と住民意識の変遷から

植民地経営の効率性を高めるためにマニラのよ

うな植民地首府は、政治的・経済的な中枢機能が集約されて高度な利便性を有する大都市となった。そして、国内の他地域に比して突出した成長を遂げる反面、地方都市は衰退していく現象が生じた<sup>16)</sup>。このような状況下で、フィリピンの一地方都市ビガンは、生き残り戦略として外部の制度であるUNESCOの世界遺産登録を切り札として利用し観光を主体とした飛躍的な経済効果を期待しつつ、世界遺産の保護との間で難しい舵取りを進め、ある程度成功させて国際的評価を得た<sup>17)</sup>。

それまでビガンにおける世界文化遺産の登録は、2度申請されたが見送りとなった経緯がある。ビガンでは、スペインの植民地支配に抵抗した人物や大統領など、フィリピン史で活躍した著名人を多数輩出しており、フィリピン国内に於いてはもともとビガンの歴史上の価値は極めて高いことが意識されていた。しかし、世界文化遺産の登録には、一国史の中での意義や価値はさして重要なことではなかった。この時、UNESCOは、どのような人類普遍の価値があるのか説得力を持って語るだけの壮大なストーリーを問うたのだがそれには応えられなかった。そのため、試行錯誤を通しUNESCOの基準に対して認められるように、同じスペインに植民地支配されたラテンアメリカとも異なる、ヨーロッパとアジアとの文化が融合した異種混交性こそビガンが世界に誇れる文化遺産の中身であるという「語るべき歴史」としてのマスターナラティブが創造された<sup>18)</sup>。

世界文化遺産に登録される以前、ハバイ・ナ・バトでさえ、登録を意識していた実質的な活動の第一歩は所有者による運動であった。当時、同じ行政区に住むビガン住民であっても、自らが帰属する文化集団内で個別的にその重要性を自覚していただけて、他の文化集団からするとどうでもよかった。それが、ビガン町政府が観光開発の手段として遺産の登録や保護を活用するという思惑から、公的プロジェクトとして世界遺産登録へと繋がるよう展開していく過程で、文化集団間の壁を越え、ハバイ・ナ・バトが「ビガンらしさ」を表現するものとして消費されていった。そしてマスターナラティブの一つとして創造され、住民全体に認識されていった。それらを補完するローカル

ヒストリーとして伝統的な手工芸品(例えば陶器、テラコッタ、綿織物など)や地元特産品(例えばロンガニサと呼ばれるソーセージなど)の地元特産品の制作・製造までもが、世界文化遺産という文脈の中で観光資源開発として語られるようになった。世界文化遺産の保存中核地区を構成する2つの空間が存在することから、帝国と交易というグローバルヒストリーと連動したマスターナラティブ、即ち「語るべき歴史」を創造した上で、世界遺産観光の新たな資源として当初の企て通りローカルヒストリーも全体を構成する一部としてマスターナラティブに包摂し体現していったのである。ルソン島北部にはイロカノ語を母語とするイロカノ人が居住していたが、それに伴い「ビガン人」を名乗る住民も出てきているし、世界遺産を扱った資料の中にも「ビガン人」の標記が散見されるようになってきている<sup>19)</sup>。

以上を顧みると、観光を主体とした地域経済の発展を目的とし、その手段として世界遺産の登録及び保護が進んだことや、壮大なストーリーがビガン住民に実感あるものとして繰り返し創造され定着していった経緯が見えてくる。そこでは世界文化遺産の登録を契機に、経済発展を目的としてマスターナラティブが創造されローカルヒストリーと結びつけられながら「歴史都市ビガン」が創造され本質化されていく危険性が憂慮される。

### Ⅲ シンガポールの小学校社会科の教科書における「歴史都市ビガン」

#### 1 UNESCOのいう「顕著な普遍的価値」

シンガポールとビガンとは、植民地支配下で成立し中継貿易港として発展した過程で都市計画や植民地建築が進んだ点で共通性がある。世界遺産条約の40周年記念日に、世界遺産の管理における最もよい実践モデルとして表彰されているという点でも、「歴史都市ビガン(Historic City of Vigan)」の記述に着目する意味は大きい。

ビガンは、マニラの北方約400kmにある南イロコス州の州都である。旧市街地が1999年に世界文化遺産に登録された。UNESCOの世界文化遺産についてのインターネットサイト“Historic City of Vigan”では、世界文化遺産への登録に関する「顕

著な普遍的価値＝Outstanding Universal Value」の「基準」や「完全性」及び「真正性」が示されている。それを抜粋して第2表の通り整理した<sup>20)</sup>。このような情報が、教科書記述に反映されていることは否定のしようがない。

第2表 「歴史都市ビガン」の顕著な普遍的価値

基準(ii): ビガンは、アジアの建築デザインや構造と、ヨーロッパの植民地建築や都市計画との他に類を見ない融合を表している。
基準(iv): ビガンは、東アジアと東南アジアにおけるヨーロッパの貿易都市の中でも非常に無傷でよく保存されている例である。
<b>完全性</b> 「歴史都市ビガン」の価値を明示するために必要なすべての要素は建造物群の中で含まれている。これは、十分に計画し保存されたスペインの植民都市としての意義を表現していることを保証する。現在のところ、遠方にいる所有者が手入れをしないために状態が悪化している少数の家屋があるが、ビガンの家屋の重要な特徴の大部分は、保護されている。
<b>真正性</b> ビガンは、グリッド状の道路様式、歴史的な都市計画や空間の利用といった真正性を維持してきた。歴史的な建物は所有者の1階での商取引、2階では住居という彼らの伝統的な使用法を維持している。ほとんどの家は残っているがよりよく保存された住宅には、大規模な居住空間を小さなアパートに細分化したり、商業使用のために1階の空間を変更したりと、内部の変更が行われている。新しい使用を可能にするために完全に作り替えられた結果、多くの構造が、真正性を失ってしまった。そして、放棄されたり、放置されたりして朽ちるがままにされた構造物もある。煉瓦、木材、カビス具、漆喰や石膏のための石灰といったような建築資材は、全て周辺地域から入手されていたが、木や漆喰や石膏のための石灰のような伝統的な建築資材の欠如は、結果としてセメントや屋根葺きのための亜鉛メッキされた鉄の板のような近代的な資材の使用を促もした。しかし、場所が(世界遺産リストに)登録されたときから、真正性を維持する必要性の認識は劇的に拡大している。現在では残っている伝統的な建築資材を利用しながら、過去3世紀にわたって培われてきた保存方法が再度導入されている。

(筆者訳・作成)

「顕著な普遍的価値＝Outstanding Universal Value」があるという点で、ビガンは一つの地域として固有の要素により特徴付けられた一定の空間的広がり認められ世界文化遺産に登録された。それが、他に類を見ず特別な価値を有しており、全人類のための世界の遺産の一つとして保存しなければならぬもので、しかも非常に無傷でよく保存されているということが登録の理由である。

「真正性(authenticity)」と「完全性(integrity)」を念頭に置くと、特定の世界文化遺産が「どこにあるのか」、「どのような状態か」、「なぜ、そこに



あるのか」、「どのようにして現在に至るのか」、「どのような影響をもってきたのか」、「人類共通の遺産として保護・保存する必要性がなぜあり、そのための対処はどのようにあるべきか」という問いかけに答えることで、「顕著な普遍的価値＝Outstanding Universal Value」は理解できよう。これは、「地理学者の問いかけ」と軌を一にしており、「顕著な普遍的価値＝Outstanding Universal Value」を学習する際に、地理学研究の中心概念である「位置と分布」、「場所」、「人間と自然環境との相互依存関係」、「空間的相互作用」、「地域」を意識しておくことには大きな意味がある<sup>21)</sup>。

そこで、UNESCOのホームページ「歴史都市ビガン(Historic City of Vigan)」の「顕著な普遍的価値(Outstanding Universal Value)」に関する「概要(briefsynthesis)」の全文章(以後、UNESCOの記述と表記)<sup>22)</sup>、教科書の全文章(以後、教科書の記述と表記)<sup>23)</sup>、地理学者である応地(2005)の植民都市建設に視点を当てたフィールドノートの抜粋(以後、応地の記述と表記)<sup>24)</sup>を第3表の通り地理学研究の中心概念に基づき分類し比較してみた。

## 2 UNESCO記述から見た教科書の記述の特色

第3表に基づきUNESCOの記述と教科書の記述について比較してみる。「位置と分布」は、いずれもフィリピン国内での相対位置のみが示されている。「場所」についても、エイブラ川が作った三角州に位置するという記述以外はない。「人間と自然環境との相互依存関係」の記述もない。つまり、世界文化遺産としての文化的景観が造り出されるに至った特徴的で多様なはずの・自然的人文的諸要素やその関係性については記述が見当たらない。「空間的相互作用」についても、世界文化遺産登録の契機となった交易拠点としてのビガンの存在が、交易拠点であったという事実のみ若干記されているだけである。財や情報の交換、人口移動などから見た地域間の関係性から、交易拠点として機能した経緯や理由は見当たらない。登録される直接の要因の商業的な空間の成立に関しても、UNESCOの記述が中国系メスティーソの存在と関与について触れているが、成立の経緯や理由はいずれからも読み取れない。

「空間的相互作用」に関して、UNESCOの記述と教科書の記述の違いは、前者にはない世界文化遺産の登録とは無関係の観光資源や地場産業など、経済発展を意識したローカルヒストリーが、後者にはかなりあることである。このことは、空間的にも時間的にも固有の自然的要素や社会・経済的要素により特徴づけられた一定の広がりとしての「地域」についての記述にもいえる。

「地域」については、いずれも、世界文化遺産に登録された理由が、第2表の登録基準(ii)及び(iv)に沿うように記述されている。また、植民地支配時代の建築様式の典型例として商業的空間にある2階建て家屋を大きく取り上げている点は共通である。

「地域」に関して経済発展を意識したローカルヒストリーの有無以外に、大きな違いは2点ある。1点は、UNESCOの記述では、ハバイ・ナ・バトがある商業的な空間に記述の重点があることは確かであるが、教科書の記述では皆無のグリッド状の道路様式、歴史的な都市計画、2つの広場を中心とした公的な空間やそこにある歴史的建造物についてかなり詳細に言及されていることである。もう1点は、UNESCOの記述では、16世紀からの始まった植民都市としての公的な空間やそこにある歴史的建造物の建設時期や用途と、18世紀半ばから19世紀後半にかけての中国系メスティーソにより行なわれた商業的空間にある2階建て家屋の建築時期や用途とが異なることを経時的な視点から明らかにしていることである。教科書の記述ではそのような視点がない。

要するに、教科書の記述は、UNESCOの記述から見ると、以下の3点の特色があるといえよう。

- ① 教科書の記述は、UNESCOの記述を簡略化し、しかも、ハバイ・ナ・バトが集積している商業的な空間の内容に特化していること。
- ② 教科書の記述は、UNESCOの記述にはない経済発展を意識したローカルヒストリーを付加していること。
- ③ 教科書の記述は、UNESCOの記述には見られる公的な空間と商業的な空間の関係性を示す経時的な視点が見られないこと。

第3表 地理学研究の中心概念からみたUNESCOの記述と教科書の記述の比較

	UNESCOのHistoric City of Vigan Brief synthesiskの全文章記述	Inquiring Into Our World 6 A Historic Town of Viganの全文章記述	フィリピン ビガン市でのフィールドノート 植民都市建設と1573年植民例からの抜粋
位置と分布	○フィリピン群島にあるルソン本島南イロコス州北西部の海岸線近くにある。	○歴史都市ビガンは、フィリピンのルソン島の北西部一角あたりにある。	○スペイン支配の浸透とともに、植民都市が北部に建設されていった中で最も北部にあたり、中国・台湾・日本との関係を見据えた東アジア海域と太平洋の接点である。
場所	○エイブラ川の三角洲に位置している。	○エイブラ川の三角洲に位置している。	○東の太平洋岸を襲う夏の台風を避ける西海岸にある。 ○ルソン島北端部の沖合は、ヌエバ・エスパニーヤに向かう太平洋横断のガレオン船が航路を北東方向に転じて、黒潮をとらえる転換点にあたる。 ○ボギド川がゴヴァンテス川とメスティール川とに分流した南シナ海から3～5 km上流の分流点を都市域の北東コーナーとして、交通の便のよい両河川の間に建設された。
人間と自然環境との相互依存関係	○該当なし	○該当なし	○メスティール川はビガンの東辺では切りたつた断崖をなして都市部は段丘上に位置しているかのようで、南西方向に流下し、ゴヴァンテス川は河川敷を大きく広げて西流していくため、産品の中継・集散のための船通路としてだけでなく軍事的な防御上の意味がある。 ○南シナ海に注いでいるメスティール川の河部は、そこから延びる砂州によって内水面と外水面に別れており、内水面を利用した「村落兼港」がある。そこは、風待ち場所、台風の避難場所、風待ち期間を利用しての船体修理や補修を行う場所として、舷外浮材船や小型帆船時代には適地だったが、後には、港湾立地の場とはならなかった。 ○イロコス地方は、フィリピンの中で最も農業・工業(綿業)の発展していたが、1782年からタバコの強制栽培および専売制度が導入され、村落経済が解体していった。
空間的相互作用	○16世紀からの植民地時代以前にも重要な交易拠点だった。 ○建築様式は、フィリピンの他の場所や中国からだけでなく、ヨーロッパやメキシコなどの様々な文化的な要素が集まり、東アジアや東南アジアにも比類のない独特な文化や街並みに反映されている。 ○他のラテンアメリカのスペインの植民都市(Mestizo地区として知られている)との間には、ラテンの伝統が中国人、イロカノ人(ルソン島の一民族)、フィリピン人の影響を強く受けたために顕著な違いが見られる。 ○中国人とイロカノ人との間で誕生した富裕中国系メスティール達が生息していた。その区域が街全体の歴史的な足跡を残している。 ○家庭用と商用の建築様式に加えて、ビガンには多様な文化の影響を示す多くの重要な公共建築物もある。	○16世紀には、フィリピンはスペインの植民地支配下にあった。 ○貿易の中心地として建設され、まもなく地域の経済の中心地となった。 ○多くの国から人々が交易のために集まり、ここに定住した。そのため、町を歩くとヨーロッパとアジアの融合した建築様式をみることができる。 ○16世紀にスペイン人がフィリピン北部に来る前、地元の人々は織り機でinabelと呼ばれる特徴的な布を織っていた。スペイン人は強く耐久性のあるinabelに興味を示し、地元の人がinabelをボートや遠洋航海の船で使っていたのを見て同じように彼らの船で帆布に使うことにした。inabelは、今でも毛布を作るためにも使われている。 ○豊かな文化遺産があることによって、町で行われる年に一度の地域のお祭りを見ることができる歴史都市ビガンに多くの観光客がやってくる。 ○年を追う毎に、フィリピンの北部地域を訪ねたいという何万もの旅行者をビガンに引き寄せる重要なお祭りとなり、旅行者は、伝統的なゲームをしたり歌を歌ったり、美人コンテストに参加したりと一連の活動に参加している。その中でも、最も有名なイベントは、inabelがどのように作られるかを示すBinatbatanストリートダンスである。 ○1月には、もう1つのお祭りであるピガンシティフェスタがあり、この期間には、地元の人であるBiguenosだけでなく、フィリピン全国はいうに及ばず、外国からも家族や友人とともに、人々は祭りを祝うためビガンにやってくる。	○1750年に中国系人々の居住がマニラ周辺に限定されていたが、1850年に地方移住が再び認められ、中国系メスティールもビガンに回帰してタバコの生産過程に参入し生産・集散・輸送を掌握した。 ○ルソン島北部の拠点としては、中国・台湾・日本との関係を見据えるカガヤン川河口部が理想ではあるが、中国・台湾・日本からの武装来航者(倭寇も含む)がカガヤン川河口部を占拠していたため、その代替地として確保された。 ○スペイン王権の領域支配の正当性は、キリスト教の布教という点にあり、港市だけでなく先住民の居住空間でもある内都市を含む都市ネットワーク構築を志向していた。 ○ビガン建設の8年後、カガヤン川河口部を占拠していた勢力を1582年に追い出した後、そこにヌエバ・セゴビア市が建設され司教座もそこに置かれて急速に成長した。 ○東アジア貿易中継センターとしての台湾の成長、新たに成立した清帝国の海禁強化(1656年)により、ヌエバ・セゴビア市の経済活動は停滞した。 ○1755年には、北ルソン司教区の中心機能がヌエバ・セゴビアの所在地からビガンへ移転し、1758年にビガンは行政上のヴィジャ(villa)つまり町からシウダード(ciudad)つまり市となった。

	UNESCOのHistoric City of Vigan Brief synthesiskの全文章記述	Inquiring Into Our World 6 A Historic Town of Viganの全文章記述	フィリピン ビガン市でのフィールドノート 植民都市建設と1573年植民例からの抜粋
地域	<p>○ビガンは、計画的につくられたスペインの植民都市のうち16世紀に建設されたもので、アジアにおいて最も無傷で残っている事例である。</p> <p>○ビガンは、スペイン植民都市の多くの特徴、特に、グリッド状の道路様式と歴史的な都市計画を今でも維持している点で希有である。また、ビガンの重要性は、異なる建築様式が混ざり合っていないが、単一の町並みを創り上げている。</p> <p>○指定された地域全体は17.25haあり、伝統的なスペイン風のグリッド状の都市計画には隣接する二つの広場がある。</p> <p>○Salcedo広場は、少し小さいBurgos広場とともにL字型の空間を作っており、この2つの広場は、セントポール大聖堂、司教の宮殿、市庁舎と地方議事堂の建物に囲まれている。</p> <p>○街の都市計画は、植民地における地域社会の構築と管理について規定したインディアス法より指定されたルネサンス格子計画にしっかりと則っている。</p> <p>○中国系メスティーゾ達が定住していた地区には、233の建物が25本のグリッド状に作られた街道に沿って並び、街全体の歴史的な足跡が残されている。</p> <p>○2階建ての構造は、伝統的な中国の建築を彷彿とさせる急勾配の屋根で、レンガと木でつくられている。上部階の外壁は、スライドさせることができるカビス員がはめこまれた格子窓で囲まれている。</p> <p>○2階建ての既存の建物のほとんどは、おそらく18世紀半ばから19世紀後半に建設された。経済の中核地域であったビガンの衰退のため、第二次世界大戦後に、別の用途のために内部の改造された建物はほんの数軒しかなかった。中国系の業者や商人は、二階を生活空間として、一階を店舗や事務所、倉庫として利用し商売をしていた。</p>	<p>○ヨーロッパ人が東南アジアに造った貿易都市の典型例としてよく保存されているということからUNESCOの世界遺産リストに登録された。</p> <p>○現代でもビガンでは、スペインの植民支配の時代における代表的な建築様式が残っており、その典型例を観ることができ。</p> <p>○スペインの植民地時代の家に挟まれた狭い石畳の通りがある。クリソロゴ通りの両側には、交易商のものであった家が並んでいる。それらは、屋根に独特の赤い瓦が敷かれたシンプルな家である。ぶ厚い大きなドアに、部屋に通じる階段、高い天井と引き戸になった窓などが特徴的である。</p> <p>○ビガンでの魅力の1つは、時間が止まったように思われるクリソロゴと呼ばれる通りである。この石畳の通りは、自動車を通ることは許可されておらず、非常によい保存状態を保っている。</p> <p>○石畳の通りでの輸送手段は、自動車の代わりに、馬車や馬にひかれた乗り物である。</p> <p>○この石畳の通りは、夜、古い街灯によってライトアップされる。</p> <p>○5月の第一週に芸術祭のお祝いがある。この祭りは、1993年から歴史的な町の価値に対する認識を深めようと始まった。</p> <p>○1月の祭りでは、文化的なショー、パレード、ストリートダンス、フードフェア等が、工芸物展とともにある。地域のスパイスを使った百年つくづく昔ながらのソーセージである ビガン・ロンガニサを喜ぶ祭りもこの時行われる。</p>	<p>○1573年にフェリペⅡ世のいわゆる植民都市建設の指針条項を有するインディアス法が公布された時期とビガンの建設は時期的には重なることから、同法に基づくスペイン植民都市のグリッド状の街路により区割られた都市計画がビガンらしい特徴のある空間的広がりを生み出した。</p> <p>○ビガン旧市は17世紀中期に建設が始まるが、多くは19世紀後半に中国系メスティーゾによって建設されたハバイ・ナ・バト（石の家の意）と呼ばれる2階建て家屋が並ぶ景観を誇り、これが世界遺産登録を実現させた原動力になった。ビガンの都市建設の時期とハバイ・ナ・バトの建築時期との間には3世紀のずれがある。</p>

(UNESCOのHistoric City of Vigan Brief synthesisk及びInquiring Into Our World 6 A Historic Town of Viganの文章は筆者訳)

### 3 応地 (2005) の記述から見た教科書の記述の特色

ビガンは、スペイン植民都市特有の都市計画や公的な空間の建造物群を擁しているが、それだけでは類が他にあり世界文化遺産の登録はなかった。よく保存されていた他に類を見ない商業的な空間の建造物群が登録に際して注目され、教科書の記述にも大きく反映されたと考えられる。とはいえ、教科書の記述が、商業的な空間のハバイ・ナ・バトだけに焦点をあてれば、ビガンの経時的な変容やビガン以外の他地域との相対的な関係性について理解する機会は失われ「歴史都市ビガン」の成り立ちの経緯や理由を考える余地はなくなる。16世紀のまま変わらぬ「歴史都市ビガン」という誤った姿を学習者はイメージすることになっては、なぜ「歴史都市ビガン」が全人類のための遺産として保存されるべき世界文化遺産に登録されたのかという学習が展開し辛くなる。

「歴史都市ビガン」が有する「顕著な普遍的価値＝Outstanding Universal Value」の理解を深めるためには、教科書の記述で重視されているとはいえない「位置と分布」「場所」「人間と自然環境との相互依存関係」といった地理学研究の中心概念を意識した学習が、まずは、必要だと考える。それは、「歴史都市ビガン」が「どこにあるのか」「どのような状態か」「なぜ、そこにあるのか」という問いかけに答えることになるからである。

ビガンという特定の場所に植民都市が建設された意味を、応地 (2005) は他の場所群ととりむすぶ関係性の中で探ろうとするSituationの視座と、その場所に累積する局地的な諸条件から特定場所の持つ意味を考え用とするSiteの視座の両方から、経時的に考えている。

Situationの視座は、相対的な空間認識を促し、ビガンの特徴的な「位置と分布」「場所」「人間と自然環境との相互依存関係」を調べて、多様な自

然的・人文的諸要素及びそれらの関係性を他地域群と比較し明らかにしようとする。そのため「空間的相互作用」や「地域」を理解するための事実的な知識ともなる。しかし、教科書の記述は、これらの内容に浅薄で、「空間的相互作用」や「地域」に関する内容も含め Site の視座に偏っている。先に、UNESCO の記述と比較した教科書の記述の特色 3 点が相対的な空間認識への志向に欠けるのは、Site の視座への偏りによる部分大きい。経時的な空間認識が見られる UNESCO の記述にも同様の傾向はある。

一方で、応地の記述は、「空間的相互作用」や「地域」に関して景観に関すること以外公的な空間や商業的な空間にある歴史的建造物そのものに対する言及はない。それは、応地（2005）の関心が、ピガンにおける植民都市建設や都市の特質そのものに向けられたためである。この点を Situation の視座から補う場合、以下のような事実的な知識が参考になる<sup>25)</sup>。

#### 【「空間的相互作用」について】

- 石造家屋は、従来の高床式家屋に比べ、通気性が悪く快適さに欠けた。
- 1740年頃には、後にハバイ・ナ・バトと呼ばれる 1 階部分を火事に強い木骨煉瓦（石）造とし、2 階居住部分は、通風に優れた木造とするフィリピン固有の都市住宅が生まれた。
- マニラで始まったハバイ・ナ・バト建築が、19 世紀には地方都市にも広がった。

#### 【「地域」について】

- フィリピンの植民地化当初は、スペイン人も現地住民と同様の木造高床式住居に住んだ。
- 密集したスペイン人町では頻繁に火災が起きたため、スペイン人たちは石、煉瓦、瓦を用いた恒久的建造物を建て始めた。
- 石造都市建設のため、石灰・煉瓦・瓦の製造をスペイン人は中国人職人に指導した。
- スペイン人たちが、恒久的建造物を建て始めたのは、「原住民 (indios)」にスペイン帝国の威光を知らしめることも目的だった。

## IV シンガポールで「歴史都市ピガン」を取り上げる意義とそこからの示唆

シンガポールの第 4 学年の教科書『Inquiring Into Our World 4 A』においては、「イギリスの港としてのシンガポールの創設」の単元では、貿易という側面から東南アジアを巡るポルトガル、オランダ、イギリスのせめぎ合いや勢力圏の様相、イギリスの貿易拠点シンガポールへ移るまでの経緯、更には自由貿易港としてのシンガポールの立地（深い水深・水の補給・航路）のよさ、港の確保の際の地元のスルタンとの交渉まで記述してある<sup>26)</sup>。該当学年なりに地理学研究の中心概念に通底した記述があるということだ。つまり、上位学年の「歴史都市ピガン」の学習にそれが見られないのは、教科書作成者が、それらに無頓着なのではなく、敢えて触れていないということになる。

その理由は、シンガポールと同様な「東南アジアの人々や文化の多様性」とシンガポールとも「共有されている東南アジア地域の歴史や共通の絆」の発見がここでの学習の主たる目的であり<sup>27)</sup>、世界文化遺産の「顕著な普遍的価値＝Outstanding Universal Value」を理解することによってその保存に協力することではないからである。

教科書の記述にシンガポールとは異なるスペイン植民都市特有の都市計画や公的な空間の建造物群への言及がないことは、無意図的であったとしても、シンガポールと「歴史都市ピガン」との共通性への意識を促すことにもなる。

小学校社会科学習の最終単元での集大成は、東南アジア地域、特に東南アジア諸国連合 (ASEAN) に加盟している国々との協力によるこの地域の平和と安定の重要性について学習することであった。この学習は、「東南アジアはシンガポールにとってどのように重要か？」ということを理解することに直接つながる。世界文化遺産を取り上げる意義は、最終単元の学習の目標へ到達するための手段の一つであり、ナショナル・シティズンシップの育成に資するということである。

国民国家としての存続をより強固に図るために世界文化遺産を取り上げるのであれば、東南アジアとシンガポールの「共通の絆」の象徴としては、



自国の世界文化遺産を取り上げたいところである。ところが、教科書『Inquiring Into Our World』の改訂当時、シンガポールには世界文化遺産がなかった。そのためシラバスでは、第6学年「フィールドベースの学習体験」の対象として、シンガポール植物園（2015年に世界文化遺産に登録）を取り上げたのだと考えられる。この学習体験の焦点として、学習者がシンガポール植物園が果たしたシンガポール及び地域の経済的、社会的、科学的発展への貢献について学ぶことが明示されている。しかも、それに続き「世界遺産のリストに記載されるべきであると考えられる東南アジアの他の場所を特定する」という「推奨されるパフォーマンスタスク」も明示されている<sup>28)</sup>。当然、学習者には他の「場所の選定」の際、シンガポール植物園を強かに意識せざるを得ない。「歴史都市ビガン」と同様に、世界文化遺産に比類する遺産としてシンガポール植物園の存在を学習者は意識する。このような文化遺産の存在は、自ずと国民国家統合の象徴としても機能する。教科書の記述「歴史都市ビガン」の全4ページの内、2ページが観光資源や地場産業に関する記述で占められていることを併せて考えると、シンガポール植物園の世界文化遺産登録に対する国民意識を経済発展にも資することとして高めることにもなるだろう。

国民教育に資する社会科という枠組みの中で、「歴史都市ビガン」の教科書の記述がこのようななされていることは当然といえる。それは、我が国の小学校社会科で、世界文化遺産を取り上げることが、国家及び社会の発展に大きな働きをした先人の業績や優れた文化遺産についての理解を目的とした手段となっていることと同じ方向性を持っているし、国民国家にとってはこのような学習は重要なことである。

しかし、そうであるとしても、世界文化遺産が人類共有の遺産としてUNESCOの基準により登録される以上、「顕著な普遍的価値 (Outstanding Universal Value)」とは何なのか、なぜそれが世界文化遺産といえるのかという問いかけに答える必要があろう。それは、「人類共通の遺産として保護・保存する必要性はどこにあり、そのための対処はどのようにあるべきか」を考えていく学習へとつ

ながる。UNESCOの提唱する世界遺産教育に資することにもなる。第II章で示したとおり、UNESCOの記述を文字通りに理解したとしても、「歴史都市ビガン」が創造され本質化されていく危険性は拭えない。ましてや世界文化遺産への登録が自明な事実として学習者に伝達されるだけでは、真にその価値を理解することはできない。取り上げた世界文化遺産が、「どこにあるのか」、「どのような状態か」、「なぜ、そこにあるのか」、「どのようにして現在に至るのか」、「どのような影響をもたらしてきたのか」という学習を積み重ねることによって、世界文化遺産の「顕著な普遍的価値 (Outstanding Universal Value)」について理解する基盤となる知識を得ることができる。シンガポールの教科書の記述からは、以上のような示唆を得ることができたと考える。

## おわりに

シンガポールの教科書の記述「歴史都市ビガン」からは、「歴史都市ビガン」が「なぜ、世界文化遺産といえるのか」という問いかけに十分応えることができるだけの「顕著な普遍的価値 (Outstanding Universal Value)」に関する記述は見られなかった。世界文化遺産の「顕著な普遍的価値 (Outstanding Universal Value)」について理解を深め、「人類共通の遺産として保護・保存する必要性はどこにあり、そのための対処はどのようにあるべきか」考えていく学習を進めるには、UNESCOの基準の自明性を声高に叫ぶだけでは事足りない。

そもそも、UNESCOの基準があっても、個別の物件の登録に関しその都度適否は判断されるし、登録の適否についての判断が分かれることもある。長い時間の経過の中で基準の解釈が変化してきてもいる<sup>29)</sup>。だからこそ、UNESCOは、なぜその物件を世界文化遺産に登録したのかということ学習することが、今後、ますます、重要になってくる。そのようなことを考慮すると、地理学研究の中心概念を意識することは、小学校社会科地理的学習のみならず、世界遺産教育の質を高めることにもなると思う。

また、世界文化遺産は、「顕著な普遍的価値

(Outstanding Universal Value)」とともに、「国家及び社会の発展に大きな働きをした先人の業績や優れた文化遺産が有する価値」やそれ以外の多様な価値も同時に備えている。そのいずれかを唯一絶対的な価値としてとらえたり、いずれかのみを取り上げたりすることは避けたいところである。小論においては、この点については検討することができていない。今後の課題としたい。

#### 【付 記】

本研究は、科学研究費助成事業 基盤研究(C) 課題番号16K04758「諸地域の世界遺産の伝達を通して異文化理解を深める ESD 授業モデルの開発」(平成28-30年度、研究代表者 永田成文)の成果報告の一つである。

#### 【註および引用文献】

- 1) UNESCO『教師用世界遺産教育教材』日本語版、協同学校プロジェクトネットワーク、2000年、p. 15
- 2) 田淵五十生を中心とした科学研究補助金基礎研究(B)『ユネスコの提起する世界遺産教育の教育内容と教育方法の創造』(2008-2010)及び『「ESD」にアプローチする「地域・世界遺産教育」の創造』(2011-2014)の一連の研究はその代表例であり、2015年度の日本地理教育学会第65回大会シンポジウムでは、「世界遺産と地理教育—自然と文化の継承を考える」がテーマとなった。
- 3) 『小学校学習指導要領(案)』、文部科学省、2017年2月14日公開、pp. 41~46
- 4) 吉田剛「シンガポール小学校社会科教科書にみる人物の取り上げ方—ナショナルシティズンシップ育成のために—」『社会科教育研究』No. 118、2013年、p. 37
- 5) Curriculum Planning and Development Division Ministry of Education Singapore『Primary Social Studies Syllabus 2012』、2011年、pp. 1~3
- 6) 前掲5、p. 41
- 7) Curriculum Planning and Development Division Ministry of Education Singapore『Inquiring Into Our World』6 A及び6 B、2014年
- 8) 前掲7、6 B、pp. 77~78
- 9) NPO法人世界遺産アカデミー/世界遺産検定事務局『はじめて学ぶ世界遺産100』、2013年、p. 26
- 10) 「世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約(仮訳)」、<http://www.mext.go.jp/unesco/009/003/013.pdf>、2016. 11. 15. 閲覧
- 11) 鈴木伸隆「世界遺産と地域経済—フィリピン・イロコス・スール州の歴史都市ビガンの事例から—」『国際公共政策論集』No. 37、2016年、p. 5
- 12) United Nation Educational, Scientific and Cultural Organization and The City Government of Vigan 2010、pp. 10~11
- 13) 神吉敬三・箭内健次『モルガ フィリピン諸島誌』、岩波書店、1966年  
16世紀末におけるスペインのフィリピン統治の公式報告書とでもいうべき本書においても、ビガンとガレオン貿易の直接的な関係性については記述されていない。
- 14) 池端雪浦・生田滋『東南アジア現代史Ⅱ フィリピン・マレーシア・シンガポール』山川出版社、1977年、pp. 41~47、
- 15) 山口潔子、布野修司、安藤正雄、脇田祥尚「ヴィガン(イロコス、フィリピン)における住宅の空間構成と街区分割」『日本建築学会計画系論文集』第572号、2003年、pp. 1~7
- 16) 貝沼恵美「フィリピンの地方部における労働力移動の変化—グローバル化の進展がもたらした影響に関する一考察—」『地球環境研究』vol. 16、2014年、pp. 45~55
- 17) 前掲11、p. 4
- 18) 前掲11、pp. 11~12
- 19) 前掲11、p. 18
- 20) <http://whc.unesco.org/en/list/502/>、2016. 11. 18閲覧
- 21) 国際地理学連合・地理教育委員会編、中山修一 訳「地理教育国際憲章」『地理科学』vol. 48、1993年、pp. 48~49
- 22) 前掲20
- 23) 前掲7、6 A、pp. 65~68
- 24) 応地利明「フィリピン ビガン市でのフィールドノート—植民都市建設と1573年植民令—」『立命館地理学』第17号、2005年、pp. 1~19
- 25) 前掲15、p. 2
- 26) Curriculum Planning and Development Division Ministry of Education Singapore『Inquiring Into Our World』4 A、2013年、pp. 13~18
- 27) 前掲5、p. 41
- 28) 前掲5、pp. 44~45
- 29) 松浦晃一郎『世界遺産 UNESCO 事務局長は訴える』講談社、2008年、pp. 140~147、